

アムスルだより

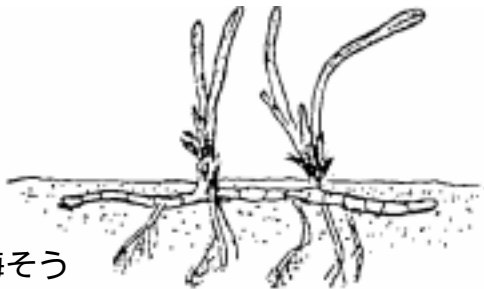
No.39 1999年 9月13日

Akajima Marine Science Laboratory 阿嘉島臨海研究所

〒901-3311 沖縄県島尻郡座間味村字阿嘉179

<http://www02.u-page.so-net.ne.jp/pb3/saburo>

TEL:098-987-2304 FAX:098-987-2875 E-mail:amsl@ryukyu.ne.jp



花の咲く海そう

-リュウキュウスガモのなかま-

同じ日本でも、冬の寒さのきびしいもつと北の地方では、植物は一年の中でも限られた期間しか花を咲かせませんが、阿嘉島のような南の地域では、一年中鮮やかな色の花々を見ることができます。研究所の周りでも、ハイビスカスやブーゲンビリアの花が咲きほこり、訪ねてくる人たちの目を楽しませています。皆さんの中に、こうした陸上の植物の花を見たことのない人はいないでしょう。けれど、海の中の植物である海そうの花を見たことのある人はいるでしょうか。「海そうに花が咲くわけない」という人もいるかも知れませんが、じつはあるんです。今回は、そんな花の咲く海そうについてお話ししましょう。

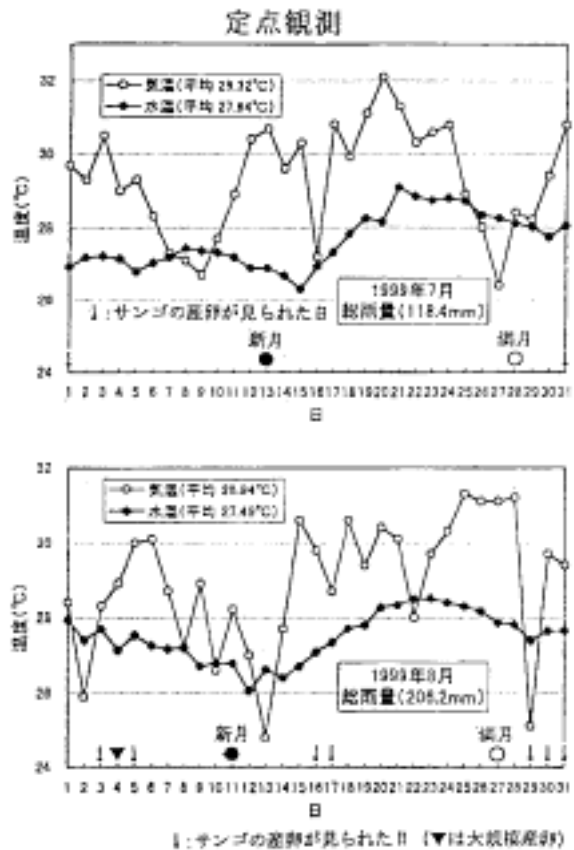
陸上と同じく、海の中にもたくさんの植物がくらしています。以前に研究所を訪れた人が調べたところ、阿嘉島の周りでも少なくとも 222 種類もの海そうが見つっています。この全部の種類が花を咲かせるわけではなく、そのごく一部、わずか 3 種類だけが、花を咲かせ、実を付けるのです。とは言ってもこれらは、とくにめずらしいものではなく、クシバルやヒズシ、マエノハマに行けば、必ず見つけること

ができます。そして、それらの花は、陸上の植物のような色鮮やかな立派なものではなく、小さくて目立たないものです。

阿嘉島で確認されている 3 種類の名前は、リュウキュウスガモ、ウミヒルモ、ベニアマモといいます。リュウキュウスガモとベニアマモは、長さ 7~15cm くらいの細長い葉で、ウミヒルモは長さ 4cm くらいの丸い葉をしていて、阿嘉島では、海岸の岸の近くの浅い砂地の海底に生えています。その他の海そうは葉っぱのような体が、岩などにくっついているだけですが、この花をつけるものたちには、根・茎・葉の区別があり、砂の中に根をはっています。今まで「海そう」とごまかして書いてきましたが、じつは、この 2 つのタイプは名前が違っていて、岩についているなかまは「^{かいそう}海藻」、砂地にすむ花をつけるものたちは「^{かいそう}海草」というように区別されています。皆さんのよく食べているアーサ(ヒトエグサ)やコンブやワカメは「海藻」、ジュゴンの食べるのが「海草」です(むかしは慶良間にもジュゴンがすんでいたらしく、方言でジュゴンのことを“ザン”、その餌である海草のことを“ザングサ”というそうです)。

遠いむかし、植物は海で生まれました。最初はとても小さな生き物でしたが、やがて進化して大きな海藻が生まれました。その後、植物は陸上に進出し、木や草となりました。木や草は、陸上での生活に

合わせて、花を咲かせ、実を付けるようになったのですが、これらの中に、もう一度海のなかにもどって行ったものたちがありました。それが、海草のなかまでです。それで海草は、海の中にすみながらも、陸上の植物と似た体の仕組みをしています。そのおかげで、得をする点もあります。南の海は、北の海に比べて水中にとけている栄養分が少ないのですが、砂の中には水中よりも多くの栄養分があります。海草は、その砂の中に根をのばし、豊富な栄養分を取り込むことができるのです。この栄養分を使って、海草は海中に葉をのばしますが、このことを、砂の中の栄養分を葉の形で海中にもち上げていると言いかえても良いでしょう。また、最近、海草が葉の表面からかなりの量の栄養分を海中にとけ出させていることがわかってきました。砂の中にあっただままでは利用できない栄養分を表に出してくれるのですから、ほかの生き物にとってもこれは大切なことです。そのせいでしょう、海草の葉の上にはたくさんの生き物がくらしています。ヒズシでとってきたリュウキュウスガモを見ても、細かな毛のような海藻やモカサと言うサンゴモのなかまなどが生えていたり、ヨコエビという小さな動物が巣を作ったり、ホシズナのなかまやヒドロ虫や直径 1mm ほどのクラゲ、海藻そのものを食べるのでしょうか巻き貝のなかまもいました。こうした生き物の生活のいくらかは、海草にたよっているのだと思われます。そして、これらの小さな生物を餌にして、また、海草のかけをかくれ家にして、小さな魚や幼魚たちが生活していることが知られています。海中に広がる海草の草原は、多くの生き物たちにとっての「ゆりかご」なのです。



阿嘉島の海より

-リーフチェック座間味村-

昨年とはうって変わって、今年の夏は水温が低い傾向にあり、8月の平均水温は過去10年間の平均値より約1低い値でした。そのためか、8月に産卵する種類のミドリイシの産卵は、満月や新月から遅れる傾向にありました。

座間味村では、世界各地のボランティア・ダイバーと研究者が協力して行う「リーフチェック」に参加し、昨年9月に座間味島北の新田浜で調査を行いました。今年は9月28日に同じ地点で継続調査を行う予定です。昨年は白化したサンゴが多く見られましたが、今年はどうなっているのでしょうか。多くの方の参加をお待ちしています。詳しくは、研究所の下池までお問い合わせ下さい。